

東京驛丸の内驛舎の復元されしこと喜ばしきかぎりなり。この十月一日に天皇皇后兩陛下臨席され、記念式典の盛大に催さるゝ豫定なりしが颱風接近により中止になりたること残念至極なれど、大雨降りて地固るとの警句なれば、幸先一段とよからむと思ひ定めたり。

急なることなれど、今夕新装なりし丸の内驛舎にて食事せむことを思ひ立ちて妻具し、東京驛に降る。復元開業して一週間と経たぬことなれば、食事の店に空席見つくるはむつかしからむと覺悟しをりたるに、復元驛舎の然る店にて偶々豫約の空き見つけられ、思ひ立ちの首尾一貫せられたり。ドームの見學は食後となりたり。

余が東京驛の新装にこだはりありしは、福田恆存先生の書かれしコラムのゆゑなり。何十年前前のこの福田發言のいつか實現せむことを、心深くに心待ちしてをりしが、果してその通りになりたることに快哉を叫びしものなり。

東京驛の三つのドームが空襲で焼け落ち、そのかはりに最近三角形の屋根が出来た。宮城の方からそれを見るたびに腹が立つ。不様で見られない。戦前の東京驛は大禮服にナポレオン帽をかぶつてゐたが、現在の東京驛は、服のほうは昔のまゝ大禮服だが、帽子は戦闘帽といふところだ。東京驛は今日使用中の必需品で文化財ではない。文化財ではないから保護する必要はない。したがって金はどこからも出ない。雨さへもらなければいゝといふわけだ。

福田恆存先生、今年生誕百年といふことなれば、東京驛の誕生とほとんど年を同じくせり。鄰町の神田の生れ育ちといふこともあり、一段の愛着覺ゆるは自然のことにて、散歩の足は自然と皇居、丸の内に向ひたりと聞く。文中「三つのドーム」とあるは、戦時驛舎空襲に焼かれて三階建てが二階となり、それを宮城より眺むれば、三つの同じ寄棟屋根の竝ぶ驛舎となりたればならん。されど元の驛舎の復元せられたるはプラットフォウムに添ひたる横長き建物の南と北それぞれに二つの穹窿（ドーム）ありて、中央はホテル入口の三角寄棟屋根にてアクセントをなす。ナポレオン帽は威厳を帯びさせむとて横かぶりせるものと聞けど、東京驛が穹窿はものものしさよりは、いたづらつ子の丸帽かぶりて、驛舎の蔭から覗きをるかのごとき可愛いらしさ感じさす。内部に入ると、穹窿特有のパワー天井より浴びせらるゝも、鳥や十二支の動物に加へ、なぜか子供染みし、後光のごとき秀吉が兜の浮彫りありて、帽子の外観と辻褃あはせたるやうに感ぜらる。

福田先生のおきらめ顔なりし金の調達は、寔に巧妙なるからくりにて可能とせりといふ。高層建築なれば容易に調達可能と思はるゝ五百億圓を、ただの三階建てなれば、容積率九百パーセントを利用し、空中權を賣りて作りしものとか。制度手直しなど、官民協力しての事業なれば、復元を前提とし、國も事前に「國指定重要文化財」に指定せりと聞く。かくて文化財としての保護はなされたり。